

石巻市



文化財だより No. 2

特集・市内文化財の現状

目次

- 埋蔵文化財の現状…………… 2
- 石巻市板碑の現状…………… 5
- 石巻市の自然林…………… 6
- 近世・近代資料の現状… 8
- 住吉の旧毛利家…………… 10
- 石巻鋤銭場と…………… 12
 斉太郎節
- 石巻市根岸地区…………… 13
 民俗資料調査報告(1)
- 史跡散歩…………… 16
- あとがき…………… 16

発行・石巻市教育委員会
監修・石巻市文化財保護委員会

(写真は河北新報社提供)

埋蔵文化財の現状

文化財保護委員 木村敏郎

はじめに

遺物や遺跡を手がかりとして歴史を復元する科が考古学である。だから考古学上、遺跡と言えども先に先史時代のそれであるが、歴史時代に入っても遺跡は貴重な歴史の証拠となるものである。

特に古代日本史は六国史を中心とした中央の歴史であり、遠隔の石巻は、日本史の中に断片的に見えかくれるに過ぎない。文献史料を補い、石巻市の古代史を生か生きと懸念するために、郷土の遺跡は、その一つ一つが大切に保存されなければならない。

縄文時代の遺跡

市内の縄文遺跡は、消滅したものを含め二十箇所余が確認されている。遺跡の形態上から考察すれば、丘陵裾部に位置するアサリ等を主体とする貝塚と、丘陵斜面や海跡台に位置するカキやサザエ等を主体とした貝塚に大別することができる。前者は北上川の沖積が比較的早く進んだ地域の貝塚で④沼津貝塚、①南境貝塚、⑩小沢貝塚など規模の大きい貝塚がある。沼津貝塚は、縄文時代の石巻を代表する貝塚であることは言うまでもないが、考古学上の記念碑的貝塚であり、昭和四十七年、国指定史跡となった。一万点余を越える毛利コレクションの中心が

この貝塚から出土した骨角器、土器等である。石器時代の生活のすべてをここに

見ることができるといっても過言ではない。南境貝塚も、東北地方の縄文時代後期編年上、標準遺物を出土する大貝塚であったが、近年の開発ブームの中で開田と宅造のため主体部を破壊されたことは残念である。後者の多くは、万石浦湾や

浜浜湾周辺海跡台の縁辺部にあり、小規模な岩礁性貝塚が多い。この場合、土質が酸性の地点や小規模な遺跡は貝層を失

つて包含層の様態を呈するものが多い。しかし、後者の貝塚にも規模の大きい

ものがある。⑨屋敷浜貝塚や⑤仁斗田貝塚がそれである。特に仁斗田貝塚は規模

が大きく、しかも島嶼に営まれた岩礁性貝塚として特異な存在である。開発の進

む現在、早急に保護対策を講ずる必要がある重要貝塚の一つである。

弥生時代の遺跡

弥生時代の遺物は現在次の五遺跡で確認されている。

遺跡名	出土遺物
垂水田貝塚	土器型式
沼津貝塚	土器片
伊原津淵窟	寺下開式 土器片人骨
製木畑貝塚	土器石包丁
一本杉貝塚	土器片

縄文時代比して、遺跡の数・規模ともに稀少しており、しかも多の場合、他の時代の遺物を出土する遺跡から断片的な資料が確認されているにすぎない。

初期農耕に適合する自然条件がまだ十分熟していなかったものとも考えられる。

今後、この時代の遺跡の探索は、沖積地を注意が必要であろう。

ともかく石巻市におけるこの時代の遺跡の性格や地域の姿は今後の調査にまつと時代が大きい。

古墳時代！平安時代の遺跡

古墳時代以降になると、土師器や須恵器と呼ばれる土器が使われている。これら

ら出土する遺跡は現在市内に四十箇所以上の多くを数えることができる。うち

大半は奈良時代以降の遺跡で占められて

いるが、これは、律令制度の浸透にもつながり、農業基盤の整備また生活や生産技

術の高揚を示すものと言えよう。

土師器、須恵器を出土する遺跡については、古代畿内政権の展開と大きななか

わりがある。地域における政治社会の成立を考へる場合、不可欠な存在である。

また遺跡個々についても、それは点の存在ではなく、周辺地域や中央との関連

で、線や面として捉えていかねばならぬ性格をもっている。今後土師器、須恵器

を出土する遺跡は、更に時期を細分して検討する必要があるが、性格上から概観

すると次のようになる。

1、墳墓遺跡
高塚古墳は西日本では四世紀から作ら

れているが、石巻市内のものは七世紀以後の末期古墳と思われ、釜地区に一基認められている。⑧釜西古墳は旧状が著しく失われており、⑦釜東古墳は周辺の宅

地造成から地主の好意でからくも保護されている。

石巻市史第一巻では湊五松山洞窟遺跡(横穴古墳?)が報告されているが、現在

は採石その他で地形も著しく変わり、地域古代史解明の鍵の一つを失ったことは残念である。

2、生産遺跡
万石浦の南岸には製塩土器を出土する

遺跡が点在する。③一本杉(須崎浜)はその中でも特に重要な遺跡で、遺物の出

土が顕著であり、貝層も認められる。

また④大浜遺跡の汀線に接した地点には製塩炉や乾溜用ビット?が確認されている

。現在製塩土器が確認される遺跡は次のとおりである。

遺跡名	時代	主要出土遺物
製木畑貝塚	平安	製塩土器 土師須恵
一本杉貝塚	平安	土師須恵
胡根浜遺跡	平安	土師須恵
大浜遺跡	平安	土師
青木浜遺跡	奈良	土師須恵
垂水田貝塚	平安	土師須恵
法善寺下貝塚	平安	*

また鉄鏡についても近年若干ながら遺跡が確認されて来ているが、未調査の詳細は不明である。また水沼、真野丘陵奥部の谷合いから、多量の鉄滓が確認されている。既知の遺跡は次のとおり。

遺跡名	時代	主要出土遺物
堤貝塚	平安?	須恵フイゴ羽口・鉄滓
鹿妻貝塚	中世?	フイゴ羽口・鉄滓
新金沼遺跡	古墳?	鉄滓
羽黒山遺跡	平安?	フイゴ羽口・須恵

窟址については、古く梅ヶ丘遺跡が報告されており、複数の窟窿が存在したらしいが現在旧状は全く失われている。

3 集落遺跡
 稲井大谷地には一ノ坪地名があり、高木地区にも一ノ坪地名がある。一ノ坪は律令制下にも一ノ坪地名が設定されたことを暗示する場合が多く、航空写真と明治の土地図から検討して、その可能性が高いと思われる。条里とのかかわりの中で律令農民の生活跡を探る必要がある。遺物の散布から集落跡は、稲井地区、渡波地区、山下大街道地区を考へることが出来る。稲井地区は真野川周辺の丘陵地帯であり、真野町内原遺跡には聚穴の断面が露出してゐる地点がある。

渡波地区は、鹿妻から鹿松、葎塚へ帯状に一軒以上をたたり遺物が散布しており、大集落を予想させるものがある。東端、垂水川の岩除付近からは、戦手刀が出土するなど、周辺諸遺跡や条里とのかわりをもつ場合、重要な意義をもつ遺跡である。近年主要部に採石場ができ、次第に住宅も増えて破壊が進んできている。

山下地区は、長者伝説の残る地域で開発も古く、中里地区一帯の広範なデルタ地域に、土師器、須恵器を出土する大集

落が存在したと思われるが開発の進んだ現在、多くが宅地化され旧状は失われている。大街道地区は、北上川の古い氾濫原であり、それだけに耕作条件がよく、土師、須恵を出土する遺跡が各所に分布している。

中世・近世の遺跡
 石巻市におけるこの時期の遺跡は、館跡、集落跡、寺院跡、経塚等に分類することが出来る。

1. 館跡
 市内における館跡は、風土記書上等から、十数箇所の地点を掲げることが出来るが、当時の伝承を基に記載されたものもあると思われ、吟味が必要である。現在、顕著な遺構を残し、館跡と確認されるのは左記の箇所である。

遺跡名	規模 m	遺構
南境館跡	100×80	土原空堀平場・礎石
鯉の果館跡	300×150	・
高木館跡	150×80	・
水沼館跡	100×80	空堀・平場
寺館跡	100×50	空堀平場・井戸・礎石
早坂山館跡	100×50	・
橋館跡	100×50	空堀・平場

この他史料上確実な日和田山城跡などもあるが、現遺構上確証のないものについては、記載から除いた。遺構の不明確なものについては今後、遺物の面から検討する必要がある。

2. 集落跡
 従来、中世期の集落については、言及する資料がほとんどなかったが近年、断

片的ではあるが、発見されて来ている。いまのところ、渡波地区一葎塚、垂水川の両遺跡から遺物が確認されている。垂水川からは、中国産と推定される、青磁や割縁陶器が発見されているし、また葎塚からは、古備前の系列と思われる陶器片が確認されている。両遺跡はその主体が近世にあると思われ、染付の磁器破片等も多量に確認されている。中世文書による郷土史研究に大きな制約のある現在、これらの遺跡が担う役割は大なるものがある。

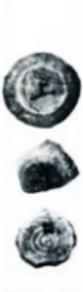
3. 寺院跡
 中世以前の寺院跡については、伝説的な、魔鬼山寺跡がある。桜川上流の船石植現社一帯がその跡と言われるが、実地調査の結果では、庭園一部の築堤、建物跡と推定される平地地形が認められている。ただし、当該遺構の所属年代が不明なため、あるいは、近世以降の船石植現社にかかる遺構であるのかもしれない。また安楽寺跡、専称寺跡は中世期の寺院として、その所属年代がほぼあきらかであるが、前者は開田のためその遺構はすでに失われている。専称寺については一部遺構が認められるらしいが未調査のため詳述できない。近世の寺院址としてはその遺構をとどめるものに法泉寺跡がある。建物跡、池跡等の遺構が報ぜられているが、未調査である。

4. 経塚
 明神山経塚、平形日影山経塚、田代十三塚の三箇所が知られている。また安楽寺跡からも一字一石経が検出されており

この種の経文埋納箇所が存在したらしい。これらマウンド遺構の中には、本来経塚以外の性格をもつものもあらうと思われるが、この点については将来の調査をもって決定すべきであらう。若干問題はあるが、渡波踏坂山、沢田日影山にも各一基のマウンド状遺構が認められておりこれらについては、再調査するとともに、今後この種の経塚遺構については、丘陵尾根部分を注目する必要がある。

おわりに
 石巻市における遺跡は、社会教育課の遺跡分布調査により、現在まで八十余箇所が確認されているが、その中から随意代表的な遺跡を中心に概説した。しかしながら稲井地区の一部、半島部の調査が不十分であるので、この数は今後増加するであらう。49年度については、特にこうした未調査区域を対象に調査が実施される予定である。

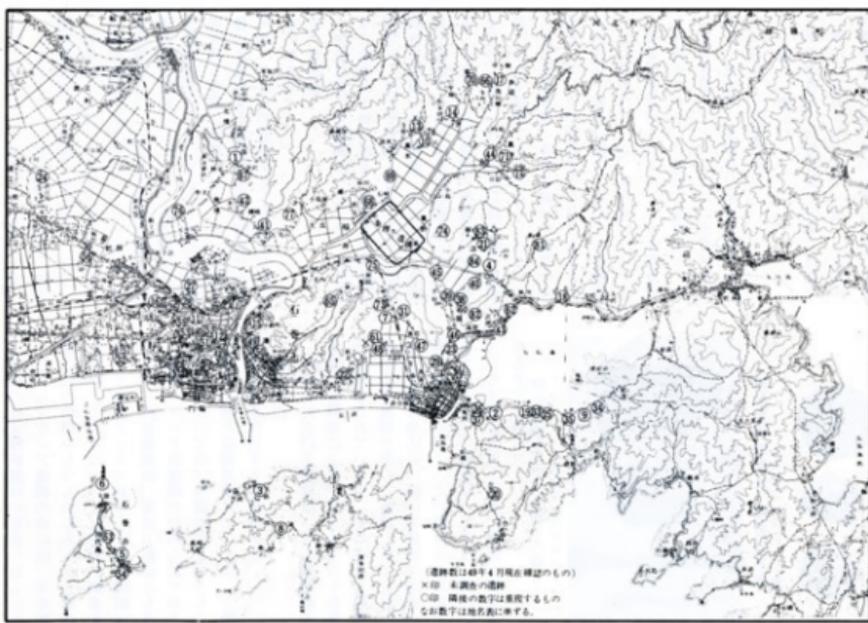
伊原遺跡発出土土師器と人骨
 (毛利コレクション)



石巻市遺跡地名表

No.		遺跡名		時代	
28	清水尻遺跡	奈良・平安			
27	中里遺跡	古墳・平安			
26	田道町遺跡	古墳・平安			
25	神林遺跡	縄文			
24	新山崎遺跡	古墳・平安			
23	垂水岡貝塚	縄文・江戸			
22	伊原津洞窟	弥生・古墳			
21	越田古道跡	縄文・平安			
20	山居遺跡	縄文・平安			
19	胡桃浜遺跡	縄文・平安			
18	志の畑遺跡	縄文			
17	中入畑遺跡	縄文			
16	横堤遺跡	縄文・奈良			
15	小多田遺跡	縄文			
14	館山遺跡	縄文			
13	寺前貝塚	縄文			
12	水蔵寺貝塚	縄文・平安			
11	明神山下貝塚	縄文			
10	小沢貝塚	縄文・平安			
9	屋敷浜貝塚	縄文・平安			
8	福倉屋敷貝塚	縄文			
7	堤貝塚	縄文・平安			
6	二鬼崎遺跡	縄文			
5	仁平田貝塚	縄文			
4	沼津貝塚	縄文・平安			
3	アノ浜遺跡	縄文			
2	梨木畑貝塚	縄文・平安			
1	南境貝塚	縄文			
No.	遺跡名	時代			
29	玉塚貝塚	奈良・江戸			
30	芋殺遺跡	古墳・江戸			
31	際遺跡	古墳			
32	西ヶ軒屋遺跡	古墳・江戸			
33	一本杉貝塚	弥生・平安			
34	青木浜遺跡	奈良			
35	法音寺下貝塚	平安			
36	五十鈴桂下貝塚	平安			
37	平形貝塚	平安			
38	平形山根貝塚	平安			
39	磯田貝塚	平安			
40	箕輪山貝塚	平安			
41	水貫山遺跡	平安			
42	町貝塚	平安			
43	内原遺跡	縄文・平安			
44	取掲貝塚	江戸			
45	鹿松貝塚	奈良・平安			
46	鹿妻貝塚	奈良・江戸			
47	五松山洞窟	古墳			
48	梅ヶ丘遺跡	縄文・平安			
49	羽黒山遺跡	縄文・平安			
50	流石神社下遺跡?	平安			
51	新全沼遺跡	古墳?			
52	釜東古墳	古墳			
53	釜西古墳	古墳			
54	明神山経塚	古墳			
55	明神山経塚	古墳			
56	明神山経塚	古墳			
57	明神山経塚	古墳			
58	明神山経塚	古墳			
59	明神山経塚	古墳			
No.	遺跡名	時代			
60	平形山経塚	中世			
61	騎坂山経塚	中世			
62	沢田山経塚	中世			
63	田代十三塚	中世			
64	日相山経塚	近世			
65	魔鬼山寺跡	中世・近世			
66	安楽寺跡	中世			
67	南境寺跡	中世			
68	鷺の巣館跡	中世			
69	高木館跡	中世			
70	水沼館跡	中世			
71	寺館跡	中世			
72	構館跡	中世			
73	早坂山館跡	中世			
74	陣ヶ森館跡	中世			
75	大和田館跡	中世			
76	竹下館跡	中世			
77	大瓜館跡	中世			
78	三日防館跡	中世			
79	水沼古館跡	中世			
80	小屋館跡	中世			
81	京ヶ森館跡	中世			
82	平形館跡	中世			
83	出雲館跡	中世			
84	鶴館跡	中世			

●太字は主体時期
 ●遺跡数は49・4月現在
 ●遺跡Noは分布図に对照



他を圧している感がある。昨年二月頃の予備調査で小さくはあるが、地蔵板碑が一基確認されている。現在のところ、市内における唯一の画像板碑である。さらには、板碑の中にまじって、「三本足の鳥と毛」を刻んだ碑が発見され、民俗学の資料としても貴重なものであることが、東北学院大学岩崎敏夫教授によって確認されている。



その他の稲井地区の板碑は南境金藏寺に少数ではあるがままとまっている。また竜洞院附近、日向南境の各地にも散在している。上品山頂にも三基程の板碑が認められている。

更に、渡波地区、牡鹿半島方面にも相当数散在しているようであるが、一昨年における程度の予備調査がなされた他は、精査のなされないままに放置されているのが現状である。

以上、石巻市における板碑の存在場所と保存状況を述べたのであるが、石巻市は宮城県下で有数の板碑密集地域である事は想像していただけると思う。しかしその保存状態は単に移動しないからよしといった状態であり、その殆んどは市民の関心外のものとして放置されている現状である。これが、石巻市における中世の貴重な史料の存在状態である。宝のもちくされといった感がないでもない。先にふれたことであるが、海門寺公園の文保の碑、水押グラント廟の徳治の碑のようにすでに失なわれてしまった碑もある

ので、早急な保存対策がのぞまれるのである。四十七年度において、瀧御所入の倒伏していた板碑を漆多福院(御菩提碑)脇に移動したような保存対策が講ぜられることをのぞむものである。先人の築いた文化遺産を後に伝えることが我々の責であると感じれば、一層その感が深い。



高木・観音堂板碑の形式を知るに好都合な碑(正安三年)



山下町神宮寺

山形県高木より移転されたものと伝えられる。



鹿妻 専修庵寺、名石の碑
(明水元年・一三九四年)



石巻市の自然林

— 現状と保護について —

文化財保護委員

佐々木 豊

気候が温暖で雨が多い日本では、自然の原形は森林だとされている。石巻地方は、暖帯から温帯へ移りかわる中間帯に含まれ、最も自然な林として、普通には、モミやイヌブナ等の林が考えられている。しかし、牡鹿半島の海岸部では温帯のタブ林、牧山の頂上附近では温帯のブナ林の片鱗を見ることができるよう、実際の自然の姿はかなり多様である。

これまでに調査してきた牡鹿半島の海岸部と牧山の自然林について、その概略を報告し、保護についての問題点を提示しておく。

一、牡鹿半島海岸地域

佐須浜以東、沿岸の小さな島をきむ海岸地帯で、交通不便なところが多く、自然が割合保たれており、タブ林、クロマツ林、ケヤキ林、イヌシデ林、カシワ林などの自然林が見られる。

1、桂島のタブ林

桂島は竹浜沖に浮かぶ小島で、北半分にはタブ林が発達している。タブのほか、モチノキ、シロダモ、ヤブツバキ、トベラ、オオツル、マサキキスタ、ヤブコウジなど常緑樹が多い。林床で



シダ類で最も古い形態を残しているといわれるマツバランが発見されており、その北限の産地でもある。調査したタブ林の中では、最もよく発達した自然度の高い林である。タブ林の周りは、イブキがみこな群落をなしており、全体としても自然の姿がよく保存されている島である。

2、小出島のタブ林

一番大きい島であるが、タブ林は狭く西端の巖島神社のそばにある。かなり人為的のあとが見られる林で、シナノキを混生しており、イヌガヤが多い。

タブは大きく、胸高直径一メートル四十七センチ、高さ二十五メートルに及ぶ。調査したうちでは最も大きいものがある。島の北側を除いた周辺部は、絶壁状をなすところが多く、クロマツ、アカマツ、イブキなどがそれぞれ群落をなして、自然状態がよく残されているが未調査である。

3、弁天島のタブ林

小竹浜の湾口に浮かぶ島で、南側に面した約半分に、一斉林状のタブ林が発達している。わずかにケヤキ、イヌシデが混生しているのが見られ、北側には、クロマツやイヌシデの優占する群落が見



られる。タブ林としては、仙台湾内で最も規模の大きい林である。島の周辺には、クロマツ群落、イブキ群落が発達しており、島全体としても自然がよく保存されている。

4. 生草島

弁天島の西方の、ごく小さな島で、頂上の部分はクロマツの群落となっている。その周りは、イブキ、トバラ、オオツルマサキ、オオバイボタの低木群落となっているが、その中にクロマツが高山帯のハイマツ状になって混生している。さらに下部は、海岸性の草本群落となっており、モダルのな垂直分布を見ることができ。

5. 尾崎のイヌシデ林

尾崎神社附近の海岸に、オオバボダイジュ、ケヤキ、カシワ、エゾイタヤなどを混生するイヌシデ林がある。イヌシデ



の大きなものは、胸高直径六センチ、高さ十五メートルを越す。

オオバボダイジュは北方系の種であり、このように海岸に見られるのは珍らしく林床に生えているギョウヤニンニクとともに、この林の特徴づけている。

6. 小竹浜のカシワ林

小竹浜附近はカシワが目立ち、土壌が浅く、風当たり強い環境を反映しているようである。

小竹浜では、以前

このカシワの太木を切り出し、網を染める材料として方々の浜に売られていたそうである。幹の特徴をもとにしたと思われるカサキという名で呼んでいる。



尾崎と小竹の途中にあるカシワ林は、代表的な林で、カシワを食草として育つ藪の発生地としても注目されている。胸高直径三十五センチ、高さ十三メートル前後のカシワを優占種とし、ケヤキ、エゾイタヤ、ニガキなどを混生する。林床に、ミチノクヤマタバコ、アマドコロなどの丈の高い草木が多い。

7. 佐須のケヤキ林

佐須から尾崎へ行く途中の海岸の、傾斜の急なところに発達している林で、割合広い面積にわたっている。ケヤキのほか、エゾイタヤ、エノキ、ミズギ、アワブキなどが混生し、アワブキなどは、イヌガヤ、ムラサキシキブが目立つ。環境的地形的特徴を示す群落である。



以上、海岸地域の主な自然林を紹介したが、自然林の文化財としての価値が一般に認められていないこと、「むろとり」などによる植生の破壊が、この地域での問題点としてあげられる。自然林を紹介

二、牧山

由緒ある社寺・遺跡を含み、自然がよく保たれてきた牧山は、全体が、石巻市の文化財として認識されなければならないと思う。

近年の、無秩序とも言うべき採石のしかたにより変容が著しいが、早急これを改め、牧山のすぐれた文化財としての価値を生かす。市民全体の自然、社会教育の場として、保護・活用しよう。総合的見地に立つての施策を希望するものである。

牧山全体で貴重な自然を形成しているのであるが、代表的な自然林として、三つの林を紹介する。

1. 頂上附近のモミ林

頂上附近と海深寺裏山のモミ林は、モ落・落葉広葉樹の林としては、石巻地方



ブナの老樹(牧山頂上附近のモミ林)で最も自然度の高い林の一つである。胸高直径一メートル、高さ二十メートル前後のモミを主に、ブナ、イヌブナ、アカシデなどの落葉樹を混生し、林床は一面スズタケで被われているモミ、ブナースズタケ群落である。

標高の高い所ではブナが多くなり、自然更新のようすも見られ、ムラサキシキブ、マイスルソウなども観察される。北上山地低山帯のブナ林の残存林として、県内では金華山を除いて、唯一のものである。

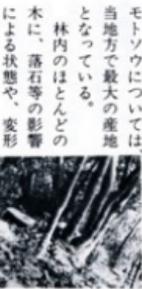
2. 御所入のイヌブナ林

御所入の境の近くにある小林分で、採石の影響を受けている。隣接するモミ林とともに、この地方の丘陵地帯の極相林とされるモミ、イヌブナ林の残存林で、本来の姿は、モミ、イヌブナースズタケ群落であろうと考えられる。市街地の、しかも低いところに残っているのは、珍しい例である。

イヌブナは、近くのコナラ林の中で、かなりの回復が認められる。

3. 瀬小急校裏のシロダモ林

南向きの崖状急傾斜地に発達した暖帯林で日光エネルギーを効果的に吸収でき崖崩れ、落石の多い環境を反映し、特異な組成のケヤキ・シロダモアオキーオオバジャーノヒゲ群落を形成している。



シロダモ、モクゲンジ、オオバノイノモトソウについては、当地方で最大の産地となっており、林内のはとんどの木に、落石等の影響による状態や、変形が観察され、この林が、厳しい環境に成り立ちなが、保安林としてすぐれた機能を果たしてきたことを知る事ができる。最近、落石、崖崩れが多く、倒れた木が目立ち枯れた木も見られるが、林の西端を破壊したことも等採石の影響が考えられる。この林の性格から考え慮すべきことであり、一刻も早い対策を関係当局に要望したい。

近世・近代資料の現状

文化財保護委員 石垣 宏

近世から近代にかけての古文書は、現在市立図書館所蔵のもの、市教委社会教育課調査、第一期文化財保護委員会調査のもの、及び毛利氏所蔵の各種古文書を把握されているところである。その他各個人で所蔵している貴重な文獻も多数あると思われるが、今後の調査によって、随時古文書の目録を整備したいものと思つている。加えて近世から近代にかけての金石文の調査も今後の課題となつてい

る。近世から近代の資料として、前述のものを中心としていくつか紹介しておきたい。金石文については、今後の調査で、印章、鏡鏡、梵鐘などを中心に全文を、石文については、石碑を中心に進めるつもりであるが、現在市内に残る有名な石碑として次の四石碑があげられる。市内萩浜月の浦に慶長の道政使節として名高し文倉常長出帆地記念碑がある。「歐南使士文倉六石衛門常長解履地」の碑で、大正十年三月、石巻の小西九兵衛氏が、その偉業を称えて建立したもので、その



裏面に、「大正十年三月三日撰政皇太子殿下啓行歐洲以九月三日無事還啓、実為無前之盛事、因欲傳比盛事於後世、即乞東郷元帥閣下之書長解履於社鹿部月之浦、表仙台御使文倉常長解履之遺蹟以為記念云、大正十一年六月下流、小西九兵衛、敬識併建」と記されている。往復七年、社鹿部月浦より発し(貞山公治家記録)て、遠くメキシコ、スペイン、ローマへの旅は決して来ではなかったであろう。その偉業を記念したものである。次に墓碑の例として、石巻築港、北上川改修に多大な業績を残した「川村孫兵衛重吉の墓碑」が、市内釜地区真言宗普賢寺の境内にある。市内東部渡波祝田浜に、「久米孝太郎盛治復讐之地」の石碑がある。これは文倉碑と同様、小西氏が建立したもので、安政四(一八五七)年十月九日、越後新発田藩士久米幸太郎、盛次郎兄弟が、父弥五郎兵衛の仇敵滝沢休右衛門を四十年目に祝田浜で討つたことを記したもので、特筆すべき仇討として数多くの著書に述べられている。文学関係としては、市内内和中公園に元禄二(一六八九)年に石巻を訪れた松尾芭蕉を追慕して、延享五(一七



四八)年俳人が建立した句碑がある。古文書は、現在市立図書館に多く保存され十進分類法に従って整理書として、「定例留」(天保十四)、「調定留」(宝曆五)、「駅法留」(地附留)、「諸御用後例留」(檢書留) (天保十四)がある。安永年間仙台藩が各地の村名由来、人頭、寺社仏閣などを記させたものに風土記があるが、「社鹿部風土記御用書出(安永二)」、「社鹿部津村風土記(写)が保存されている。これに関連して藩の改役人が書き記したものと、社鹿部萬曆改書出(元禄十二)があり、この書上は郡村内村毎の石高、面積、人口、野郎名、社社仏閣を記録したもの。市立図書館で解説済みで原本は女川町照源寺三宅太玄氏所蔵、記録者は御改御役人菊地文右衛門でこれによると、門脇村の人頭百三十四人、石巻村百二十七人、住吉八十三人、蛇田三十六人、津村百三十人、渡波百十六人と記され、その他田畑を貢高制で示している。この田畑の石高については検地帳がある。「社鹿部石巻村御検地帳(万治三)」、「社鹿部石巻村新田御検地帳」(寛文三)、「延宝二」がそれで、蔵入地に関しては初期末期から明治初期にかけて小割帳があり、「石巻



村御蔵入小割帳」(元治、慶応、明治)、「蛇田村御蔵入小割帳」(文治、慶応、明治)、「袋谷地御蔵入小割帳」(慶応、明治)、「豊越江御蔵入小割帳」(明治)、「住吉町御蔵入小割帳」(慶応、明治)がある。江戸時代には凶作飢饉が多く、そのため単作地帯の東北は多大な被害を受け、農民の疲弊が大きき、農村の荒廃を招いた時期として、享保、天明、天保期があげられる。その中で天保の大飢饉は深刻な被害をもたらした。天保四(一八三三)年六月からの大雨のため不作となり、それが天保五、六年と続き、天保七年に大飢饉となったために農民に穀物の備蓄もなく、からくも山野の草木をあさり、一方で餓死者も多数であったという。この石巻における天保飢饉の状態を克明に記したのが「天保耗成鑑」で、貴重な文獻であり、この全文が石巻市史第二巻「凶饉災害史」に載せられている。次に渡波根岸の雁部氏所蔵の古文書としては、年貢に関するものとして、「御年貢取立帳」(安政五)、「夏御年貢取立帳」(安政六、文久元、慶応二)があり、また現在の戸籍簿にされたものとして、人数改帳が数多く保存されている。社鹿部根岸村当人数御改帳(天保四)、「十三、弘化四、嘉永三、五、六、万延二、元治二)は近世の研究にとって貴重な文獻であろう。その他安政から明治にかけての「諸御用書留帳」、「諸御御留帳」、「御用御用書留帳」、「御用諸書留帳」などがある。市内代島の平塚氏には海運関係の古

文書が多数保存されているが、詳細につ
いては、前号で紹介済みなので省略したい。
その外市内の寺院には多数の寺院関係
文書が保存所蔵されている。

以上の外にも多数埋もれている古文書
も有ると思われるが今後の調査により発
掘し、この貴重な史料を大切に保存する
方策を講ずるよう願う次第である。

渡波 雁部家文書目録 (鹿松雁部己巳夫氏所蔵)

- | | | | | |
|---------------------|---|----------------------|---|---------|
| 1 (一八二五) 文政八年三月 | 社鹿郡根岸村真野村入取掃掃丁地覚帳 | 19 (一八五九) 安政六年 | 夏御年貢債取立帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 2 (一八三三) 天保四年二月初日 | 根岸村当人数御改帳 同村肝入喜兵衛 | 20 " " 十一月吉日 | 御年貢諸債取立帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 3 (一八四二) " 十三年二月初日 | 社鹿郡根岸村当人数御改帳 肝入喜右衛門 | 21 " " 六年同七年正月吉日 | 御用諸書上留帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 4 (一八四七) 弘化四年二月初日 | 社鹿郡根岸村当人数御改帳 肝入喜右衛門 | 22 (一八六〇) " 七年申ノ二月初日 | 水代手留留帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 5 (一八四九) 嘉永二年 | 社鹿郡根岸村本地御蔵入当毛御改御物成極小割帳 肝入喜右衛門 | 23 (一八六一) 萬延二年酉ノ二月初日 | 根岸村当人数御改帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 6 (一八四九) " (慶応元年分改) | 御年貢并諸上納通帳 | 24 文久元年六月吉日 | 夏御年貢諸債取立帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 7 (一八五〇) " 三年二月初日 | 社鹿郡根岸村当人数御改帳 肝入喜右衛門 | 25 (一八六二) " 二年 | 社鹿郡根岸村御蔵入新田当御改御物成極小割帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 8 (一八五二) " 五年二月初日 | 社鹿郡根岸村当人数御改帳 肝入喜平治 | 26 " " | 社鹿郡根岸村 同郡真野村江入作御蔵入新田当御改御物成極小割帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 9 (一八五三) " 六年 | 社鹿郡流留村当人数御改帳 肝入忠作 | 27 " " | 社鹿郡根岸村本地当荒起迄妻賀堂御相統料 | 肝入五郎左衛門 |
| 10 (一八五四) " 七年 | 社鹿郡根岸村御蔵入本地別段為御備之御引除当毛御改御物成極小割帳 肝入喜平治 | 28 " " | 江被引除置別帳当毛御改御物成極小割帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 11 (一八五六) 安政三年 | 社鹿郡根岸村茶畑御物成極小割帳 肝入五郎左衛門 | 29 (一八六二) 文久三年 | 社鹿郡根岸村御蔵入本地当毛御改御物成極小割帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 12 (一八五七) 安政四年二月 | 社鹿郡根岸村入数格式遺文 肝入五郎左衛門 | 30 (一八六五) 元治二年二月初日 | 根岸村当人数御改御帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 13 (一八五八) 安政五年 | 社鹿郡根岸村分同郡真野村江入作御蔵入新田当毛御改御物成極小割帳 肝入五郎左衛門 | 31 慶応元年 | 御年貢并諸上納通帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 14 " " | 社鹿郡根岸村本地当荒起迄妻賀堂御相統料 | 32 " " | 御年貢并諸上納通帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 15 " 十一月 | 江被引除置別帳当毛御改御物成極小割帳 | 33 " " | 社鹿郡根岸村御蔵入本地当毛御改御物成極小割帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 16 " 十二月 | 御年貢取立帖 | 34 " 六月三日 | 諸御用御贖留附課帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 17 " 正月吉日 | 此度 米糶御買備被成置思召ヲ以御金被下置候段被仰渡村人預割分仕候旨付帳 | 35 (一八六六) " 二年 | 御年貢并諸上納通帳 | 肝入五郎左衛門 |
| 18 (一八五九) " 六年 | 萬金代附渡覚帳 肝入五郎左衛門 | 36 " " | 社鹿郡根岸村御蔵入本地別段為御備之御引除当毛御改御物成極小割帳 肝入五郎左衛門 | 肝入五郎左衛門 |
| | 社鹿郡根岸村分同郡真野村江入作御蔵入新田当毛御改御物成極小割帳 肝入五郎左衛門 | 37 " 十月吉日 | 当冬御年貢諸債取立帳 | 肝入五郎左衛門 |
| | | 38 (一八六七) " 三年 | 乍恐地形分邊願奉申上候御事 | 肝入五郎左衛門 |
| | | 39 " 六月吉日 | 社鹿郡根岸村御百姓原屋舖 源吉 | 肝入五郎左衛門 |
| | | 40 (一八六七) " 四年辰ノ正月吉日 | 御塩場并日雇日記帳 | 肝入五郎左衛門 |
| | | 41 (一八六九) 明治二年己ノ正月吉日 | 諸御用書上留帳 | 肝入五郎左衛門 |
| | | 42 (一八七〇) 明治三年二月 | 謹前因社鹿郡根岸村戸籍 | 肝入 雁部屋五 |

43	〃	郎左衛門 支配
44	(一八七二) 明治四年正月七日	陸前国牡鹿郡根岸村戸籍帳肝入五郎左衛門
45	(一八七七) 〃 十年	御用御布告留拍帳 村長雁部五郎左衛門
46	(一八七八) 〃 十一年五月吉日	新板道中往來
47	(一八八〇) 〃 十三年辰ノ正月吉日	醤油賣立帳 雁部氏
48	〃 〃 田坂ノ十月吉日	御塩場并雇請簿帳 雁部五郎左衛門
49	〃 〃 田四月二日	田畑散田立附手拍帳 雁部八治郎
50	(一八八四) 〃 十七年正月吉日	婚禮祝儀申受納帳 雁部八治郎
51	(一八八七) 〃 二十年	醤油井釜拍帳 明治廿年度醤油石検査簿
52	(一八八八) 〃 二十一年九月	醤油仕込帳 牡鹿郡根岸村 雁部八治郎
53	〃 〃 一月	醤油酹石高帳 牡鹿郡根岸村 雁部八治郎
54	(一九〇二) 〃 三十五年旧正月吉日	大福日記帳
55	(一九〇三) 〃 三十六年旧正月元旦	塩製造帳 製造場 牡鹿郡渡波町字根岸二十五番地 雁部松蔵
56	(一九〇九) 〃 四十二年	乍恐地形分通願奉申上候御事 牡鹿郡根岸村御百姓水抜屋彌弥五右衛門
57	(不明)	乍恐地形分通願奉申上候御事 牡鹿郡根岸村御百姓水抜屋彌弥五右衛門
58	(不明)	乍恐地形分通願奉申上候御事 陸前国牡鹿郡石巻町字津牧山
59	(不明)	乍恐地形分通願奉申上候御事 陸前国牡鹿郡石巻町字津牧山
60	(不明)	乍恐地形分通願奉申上候御事 陸前国牡鹿郡石巻町字津牧山
61	(不明)	御堂屋根替二王門再建御寄進帳 別当 大徳寺
62	(不明)	御堂屋根替二王門再建御寄進帳 別当 大徳寺
63	(不明)	御堂屋根替二王門再建御寄進帳 別当 大徳寺
64	(不明)	御堂屋根替二王門再建御寄進帳 別当 大徳寺
		その他 書状、證文など多数所蔵

住吉の旧毛利家

文化財保護委員 高橋勇一郎

近世海運の発展と共に大きくなった石巻の街も度々の大火に遇っている。宝永四年湊町の大火以来明治二八年の福清の大火まで九回も大火があり街中の大半を焼失昔の面影はないが、住吉と門脇の一部に藩政時代を思わせる民家が散見出来る。その中でも住吉の旧毛利家は当時の世相と幕末の史実を秘め乍ら一段と精彩を放つ建築である。石巻港からの江戸回米は、伊達藩が享保二年住吉に十八棟六万五千俵取納の最大の米蔵を建ててから急に忙しくなった。毛利家は代々住吉の蔵守りを勤め、石巻に来てから三百年にもなると云う。住小校門前にある間口二間半二階建ての質素な建物は毛利本家で当主は名古屋に住む毛利宏さんで毛利家十五代目である。毛利宏さんの家は藩政当時の蔵守りの家の典型的なものである。蔵守りは郡奉行の末端で米蔵の警備に当たったが、御百姓を殺す御蔵守りの肩書通り半官半民の待遇だったと云う。写真の建物は毛利十一代七歳か、十一代代利兵衛により建てられたと



推察され、百二十年以前の町家である。藩政下では土農工商の生活すべてに干渉する厳しい掟があり、建築については宝暦八年「家作之儀他国者住連の宿をも仕候者は相応に可仕候障子にも唐紙の類不苦候其外脇住連並越百姓は随分相可仕候大肝入肝入検断は表向板敷迄之儀は不苦候天井押等亦可為無用事」と明治まで不變の基本の禁令が出されている。徳川禁令でも寛永十二年「万石以下之面々難為番頭座敷二間半梁に不可過」元禄十二年「千石まで二間半梁不可過、千石以下二間梁不可過」等時代によって変るが、梁間、雑作規制が度々出ている。伊達藩でも小身持の蔵守りの家は三間梁以下、足輕の家は二間半と制限され、町家も農家の土間生活を強制した程の厳しい規制はなかったが、梁間は三間以下と定められた様ですべて役人の指図を受けて作る事となって格々軒高は十五尺位が限度の様で、これら禁令がどの程度守られていたか甚だ疑問であるが、この建物は禁令を欺瞞したもので、ここに幕藩制の衰退と町人の経済支配の史実が背ける感がある。建物は梁間三間半、桁行十間以上(故あって他家に渡り現在解体工事中)一部二階建てである。屋根は勾配、破風 風返

石巻鑄銭場と齊太郎節

文化財保護委員 石島恒夫

陸前国、石巻で最初に鑄銭場が開設されたのが享保十二年（一七二七年）といわれ、その後一三八年余の間、断続的ではあるが、東北の経済の中心地として、わが町は栄えたことになる。

東北の諸藩の中で、幕府直轄の鑄銭場は、「陸奥の石巻、出羽の秋田、佐渡の相川」（造幣史八十年史）とされている。

当時の石巻地区での鑄銭は主として鉄銭でいわゆる砂型鑄造法といわれ、銅、錫、鉛を規定比率で配合した溶液を湯口から注入し、湯がすぐ固まると、型を外し、砂をこわして鑄ばなし銭、いわゆる枝銭をつくり、枝の先の銭を切りとぎ、やすりで湯ばりを取り、このあと砂垢（あか）をとるため、豆の汁で煮るといふ（毛利氏コレクション、鑄銭場絵図より）当時、全国の鑄銭場でつくられた銭は一日三〇万枚、石巻地区でも約七五〇〇枚ぐらいつくり、産業の規模としては相当なものといえるだろう（造幣局編「貨幣の生い立ち」）。

享保十二年から慶応末までの百三十八年余に渡る、鑄銭場の興廃の歴史は、そのま、石巻の経済の歴史であったといえるでしょう。

想像以上といわれる賑わいは登米郡米山村の沼倉家の奉願書によっても明らか

なように、船便だけの輸送ばかりでなく、駄馬による輸送も盛んで一月ヶ月頭余を数え、昼夜を分たず、使役されたといえる。原料及び燃料、輸送等、あらゆる面で、地理的に恵まれた、この石巻が鑄銭場として選ばれた当然の理由があったことがうなづける。

敷地一万坪、数十棟の役所、工場群、二重、三重の門構え、さらに安永年間山下鍋倉の地にも三基増設された記録からも、最盛期の町の様子は駄馬が町に溢れ、鑄銭場に入りする奉行、吹方棟梁以下役人、労働者は當時数百人を数え、操業中の石巻は経済的にも東北の中心的役割を果たした。（石巻市史第一巻）

ここで私は石巻の経済の中心的役割を果たした「米の積出し港」「石巻鑄銭場」新らしくは、「第一銀行の開設」を意義あるものとしたい。（後述）

ところで、この「鑄銭場」と「齊太郎節」についてふれて見た。「民謡辞典」「日本の民謡」「日本の民謡集」、他の著作を見て感ずることは、齊太郎という人物と、その物語の設定は正しいのだろうかといふことである。現在残された資料の中からは、安永六年の暴動をうらづけるものは何も見あたらない。

安永六年といえは鑄銭場が開設されて五十年目、一七七七年、当時鑄銭場の外に山下鍋倉前にも三基増設された記録があり、この辺りが鑄銭場事業の最盛期といえるだろう。

勿論、規模を誇る工場といっても当時のことですから保安上からも不備だらけといえるでしょう、当時鑄銭場の火災も多かったとされていますが石巻の大火の歴史の中にも安永六年は見当りません。文久三年（一八六三年）の大火が鑄銭場から出火し新田町、立町、小野寺横丁、裏町、中町、本町、中瀬、湊田町、大門崎という広範囲の火災によって、鑄銭事業廃止の決着がついた大火のぞけ、先程の安永年間には歴史的な暴動、火災は見当たらない。

私は、この齊太郎物語の成流にある物語性を拾いあげるならば、安永十年十一月の高橋彦三郎と「密鑄銭」をあけた。当時、仙台藩は財政上、多額の軍資金調達のためから幕府の公許を得ずに密鑄銭をつくり、それが露見し、高橋彦三郎一人の罪として八丈島に流され、遂に帰参せず、其地に終った。当時三十九才（仙台、正実寺、高橋彦三郎墓誌銘目）

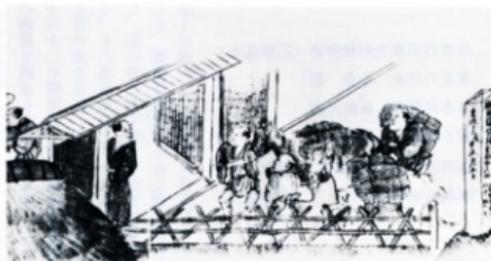
私はこの安永年間の密鑄銭の主と齊太郎節のヒロインが伝説化されているのではないだろうか……と。

齊太郎節（さいたらぶし）はその原調を「鑄銭坂」（鑄吹き唄）といわれ、それが舟こぎ唄に変わったといわれ、齊太郎は「さいとく」（歳徳）のなまり

ではないか。いずれにしても鑄銭職人の作業唄が、海の作業唄に変わったものといえるだろう。

そして、もっとも新しい「大漁唄い込み」となって、この齊太郎物語は半ば定説化されている。

新しい民謡として生れ変わった「齊太郎節」は何故か、その歴史の背景を知ることによって我々の祖先の血の脈にじむような仕事の苦しみを感じさせてくれる。そしてその時代の働く人々の心のふるさとと一端をうかがい知ることが出来るのだ。文化遺産としての民謡や民謡の真実性と、その正しい傳承の無難さを痛感する。



享保13年開設 石巻鑄銭場絵図(毛利コレクション)

石巻市

根岸地区民俗資料調査報告(その一)

文化財保護委員 鈴木東行



第1図 石巻・根岸位置図(石巻5万分の1)

- A 「通称の根岸」 a. 山崎 1 聖平崎神社 4 聖和気神社
 B. 旧地場跡(田塩田) b. 西ヶ崎 2 弁天神社 5 不動尊神社
 c. 御津木花(うつばな) 3 熊野神社
 d. 橋下

写真1

「橋下」より「野」部高を見る
 (経路即ち一右 経路さつき一左のかや倉屋後の家)

新 暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
い												
ね												
麦												
大豆												
茶												
蚕												
薪												
そだ まるき												
製塩 (地場)												

生産 産 種 (稲作と制塩を兼ねる)
 調査地 根岸鹿松(二一)一
 調査日 昭和四八年七月二八日
 話者 色川泰助(男九〇才)

仕事と用具(塩田地場作業)

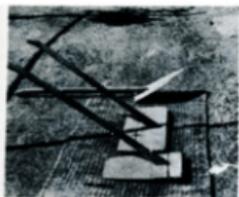
一、仕事の期間と組織
春の彼岸より秋の彼岸までである。一枚は二反内外で、一つの圃は五枚から七枚位である。主なる圃は明神釜・石田釜・鹿松釜・際釜開いで、圃組合制で五〜六人で共同製塩していた。八月に塩の神(鳥浜様)渡波新田町の祭りがあり、かん水溜(おつば)をつくる時、つばうち唄を歌いながら、打ち固めた。

二、仕事の内容と用具

(一) 砂の運搬

春に塩田「三本まんのう」で側溝(堀)一一反五畝(二反)をほり、海(長浜)から水際の美しい砂をはこびとりかえる。運搬は「砂すみ舟」で、「舟入れ」(塩田にくる海水の通路)を通り、陸地は「だんこ」に砂を入れ馬ではこんだ。昔は浜から直接、馬車ではこび、塩田のはしに砂を置いた場合は「もっこ」「ばいすけ」(竹製)写真二塩田地場作業用具

(右:鹹水箱) (左:木くわ)



の後におき
早朝、四す
みに玉にす
る。

(二) 地場作

業
三時〜四
時頃起床、
朝食前、四
キロメートル

ルもある地場に行く。地面一反六畝、一人で五数七〇を朝の仕事として「すくい」でちらす。「まんぐわ」で曳いて砂を乾燥させる。一時間の休み時間をとり、午後三時頃「よせいた」で寄せ集め、「かつあ」でほした砂を「だ(でい)」に山にもる。砂寄せは若い男の仕事である。「だ(でい)」の前の「小つば」から「だい」に塩水をかける。かけた塩水は「だ(でい)」の砂を通して種で「おつば」たがをかけた桶)にたまる。たまった塩水を「に

桶(二斗八升入れ)で(約四〇貫)かついでほし二段をのぼり「やぐら」にまける。「やぐら」のかん水は竹のくだを通して、「お(大)つば」上幅:五m、下幅:三m、深さ:一m五〇(赤土製)に溜まる(一八度〜二〇度のかん水溜まったかん水を釜幅:一丈二尺、高さ:五寸、八石入る)で煮る。二人で夜通しで交代で煮る「かます」約八俵(俵一二貫)をとる。水かけは年寄りと女の仕事である。地場作業をしなから葉巻をかねた重労働である。

(話者:根岸際四、津田はしめ(女) 九〇才)

津田新次郎(男六七才)七・二八)

仕事着

調査地 石巻市根岸際一丸ノ一
調査日 昭和四十八年七月二八日
話者 雁部はつよ(89才)
雁部さつき(82才)

	農 業		山 林		塩 田	
	男	女	男	女	男	女
頭・顔	てぬぐい あみがさ(夏)	おこきずきん(冬) (てぬぐい) あみがさ(夏)			ずきん (てぬぐい 二枚)	ずきん (てぬぐい 二枚)
手	こ	こ	こ	こ	こつばこて	こつばこて
上 体	はんてん 木綿シャツ	はんてん(5月) (たすきをして) ちやんちやんこ	きしこ (二枚にさした)			
下 体	長ももひき(秋) 半こももひき(夏) きやはん	長ももひき(秋) 半こももひき(夏) きやはん	ももひき(ズック製) 横きやはん(男) はばき(男)		半こももひき(夏) おかももひき(秋)	半こももひき(夏) おかももひき
足	すあし	すあし	メリケンズック (うすい)		わらぞうり わらじ すあ	地場たじし (杉ざし) わす
雨 具		せ背 ごも				

染・織

一、染色
「あい」……「あい」を畑に植えたのを秋刈る。葉だけをこき、手でもんで、むして床を作つてねかす。「あい玉」にかためて軒場に雨の当たらないように干す。「あい色」を出すとときそれを「こなし」。「こ」に入れて発酵させる。ぶくぶく泡が出たころ、白い糸を買つて染める。「茶」……「かしわ」幹の皮(カシヤ木)、五升、八升だきの釜で煮る。

(話者:根岸字橋の下 保原はぎの 八三才 七月二八日)

「ねすみ」……桐の木を焼いて粉にしてとる。

「赤」……はまなすの花からとる。

染料は「こが」に入れて、こくしたい時、何度もつけてしぼる。混用としてかたすみのあく(灰くど)のあくをとつておいて使用する。

(話者:雁部はつよ(八九才)七月二九日)

一、手織:綿を買い(綿を植えたのは少数であった)綿から糸をつむぎ、

なべに入れて糸を煮て、炬燵でかわかす。糸から布を「はた」で織る。自給自足で、女性の冬期間の仕事とされていた。
 (話者：保原はぎの 七・二八)
 「麻糸」：麻の皮から細く繊維をとって炭酸を入れて煮て、やわらかくしてつむぎ織る。
 (話者：藤部さつき 七・二八)

毎日の食事



一、主食：米に「そばげ」麦。困った時は「手き」白米に豆を混合し「手き」で食べたり、七分おけづき、五分づきの玄米を食べた。また「つた小麦粉をまぜて「そば」をつくる。ほし葉汁に入れて「そばげ」にして食べた。たばこは「重箱」「わっぱ」で運ぶ。

二、辅食：菜・大根・かき豆・ささげ 塩びきを主として食へ、生魚を買うのは珍らしかった。困った時は「おから」を食べた。
 (話者：藤部さつき 七・二八)

赤飯・餅・だんご

一、赤飯：祭りの日、前日からまわす節句・田植え時期・毎月一日・十五日に変わりごと・お七夜・歳かさね祝い(男：七・一五・二五・四二 女：一三・一

九・二三)

二、餅：正月(米の餅)

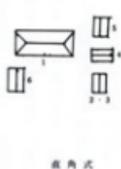
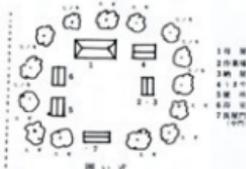
節句・田植え時期にはくさ餅

三、だんご：盆と彼岸の中目

(話者：馬場とり(八十八才) 根岸卯津木花三六 七・二八)

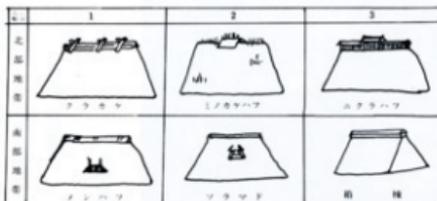
住居

一、陸前北部の民家



第2図 屋敷構えと家屋配置図(和歌森太郎編「陸前北部の民俗」より)

二、石巻市根岸の民家



第3図 屋根形と煙抜きを図譜(和歌森太郎編「陸前北部の民俗」より)



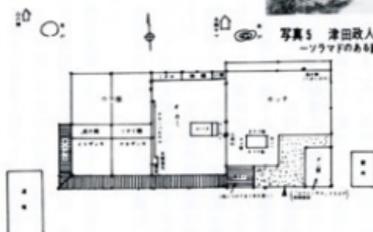
写真4 藤部さつきさん宅(図19) -ツラマドのある民家(第3図参照)



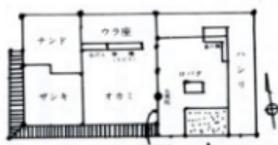
第4図 家屋配置図(直角式) (図19 藤部さつきさん宅)



写真5 津田政人氏宅(図44) -ツラマドのある民家(第3図参照)



第6図 間取り(その2) (熊野神社 法印 津田政人氏宅)



第5図 間取り(その1)一般農家 (図1-藤部さつきさん宅)

付記

今回は調査項目①(総観)、②生産履、③仕事と用具、④仕事着、⑤染・織、⑥毎日の食卓、⑦赤飯・餅・だんご、⑧住居、⑨かまど・いりり、⑩社会生活、⑪組・講の用具、⑫運搬、⑬交易、⑭一生の儀礼、⑮別火・墓制、⑯年中行事、⑰祭・道祖神、⑱山車・舞台など、⑲その他重要なもの、⑳コレクションののうち一三項目調査した。(但し報告は、そのうちの七項目である)

つぎに調査した結果について所見をのべる。
近時の生活様式の改変のため用具類は廃棄・減失が目立っている(例：地場作業の用具は三點しか見あたらなかった)したが、今後は調査地を拡大し、緊急に資料の保存、保護対策を期すべきである。

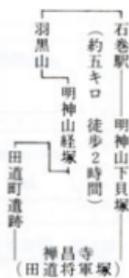
特に今回の調査で東北学院大生・阿部光良君(総観)と、遊佐満子さん(衣食の調査)の御協力と石巻工業高校人文科学部員伊藤昭彦、渡辺清美君の参加を得たことを深く感謝します。

史跡散歩

石巻駅を起点に鞍町を西進すると、明神山に鎮座する鳥谷神社の山裾にかかる。石段登口にかかる鳥居の東南部には、ハマグリから成る①明神山下貝塚(七千〜三千年前)があり、土器や石斧、貝製陶輪などが発見されている。

そのま、歩を進めると、建長七年(一一二五)執権北条氏が建長寺末寺として開山させたと伝える、全正寺(②榊島寺)に至る。境内に、市内では珍らしい石造宝きょう印塔、中里長者屋敷から移転の板碑等がある。

その北西に道を隔てて③田道將軍塚がある。またその西北前の畑地には④田道町遺跡(千五百〜千百年前)があり、土器が多量に散見される。田道公説話と、同時代の遺跡という対比はおもしろい。



再び榊島寺側にもどり山下小学校へ坂道を登ると、高所の一本松が目につく。この根元が⑤明神山経塚であり、高約三メートルの塚が存在する。納文壇納カ所といわれるが、未調査であり、古墳の可能性もある。

明山墓地を抜け羽黒山に歩を進めると⑥鳥谷神社が鎮座する山頂に至る。社名は古く平安時代(延喜式)に陸奥百社の一つとして見え由緒深い。社殿は江戸時代前期の造成であり、絵馬、絵巻等の優品がある。附近には⑦羽黒山遺跡(千百年前)⑧梅ヶ丘遺跡(千二百年前)があり、歴史の深さを物語っている。

第二号刊行について

(あしがき)

社会教育課事務局
第二号は「石巻市文化財の現状」をテーマに編集しました。

昨今、特に埋蔵文化財、天然記念物、民俗資料、建造物などは、各種開発行為の進展に伴い、当市でも急激な消失傾向をみせています。また昭和近年まで使用された各種生活用具や仕事着等の衣服生産用具等の民俗資料、及び民家も生活の改変、近代化に伴ない、いきおい廃棄散いつの傾向をたどりつ、あります。

これら文化財は私産を取り巻く環境、(歴史的環境)の一因子として、人間精神の健全な発達を促す不可欠の要因であります。従って前述の状況に即応した適切な保護施策が取られなければ、意義ある歴史遺産を永久に失する事になります。

当委員会では、この点を考慮し、保護については最大限の努力を投入する考えですが、一方、文化財の所在現状把握が不完全なため、巨視的、総合的な施策を行ないがたい現状があります。こうした基本調査は今後すみやかに実施完了させる意向ですが、同時に最下の緊急問題でもある文化財保護に対処するための早急な現状認識という観点から、本号のテーマとなりました。本号が文化財の理解、保護の促進に資するところがあれば幸いです。なお末尾ですが、本紙監修に尽力いただいた文化財保護委員会には厚くお礼を申し上げ、辞をいたします。